群教セ	G10 - 01
	平14.206集

身近な人に感謝する心情を高める道徳指導の工夫

── 中学２年生での「職場体験学習」と関連させて ──

特別研修員　　吉田　篤之

《研究の概要》

本研究は、道徳の時間と総合的な学習の時間とを関連させて、身近な人に感謝する心情を育てる指導の工夫について実践的に研究したものである。具体的には、道徳１の「身近な人に目を向けよう」と道徳２の「働く人の思いにふれよう」を基に、身近な人の努力に支えられた生活を再認識する学習と総合的な学習の時間における「職場体験学習」での経験や実践から得たものとを関連させた実践を中心に研究を行った。

【キーワード：道徳授業　中学校　感謝　総合的な学習の時間　職場体験学習】

Ⅰ　主題設定の理由

他の人とのかかわりをもつことの大切さは、中学生になれば誰でもわかっている内容である。しかし、その理解は表面的であり、実体験などに基づいた生きた深い理解でないことが多い。また他人とのかかわりの大切さをあたりまえのこととして受け止めているため、かえって深く考える機会を奪われている。最近では、自分に一番身近な存在である家族の思いやりに対しても無関心な傾向が見られ、家族との意志の疎通が図れない生徒もいる。さらに、自分自身や自分たちが生活する学校を陰で支えてくれている多くの方々の努力にはほとんど注意が払われていない。また、人から思いやりある行為を受ける場面でも、ただ表面的に「ありがとう」という言葉を発するだけで全てを済ませてしまう。そこで、身近な人々との温かい人間愛の精神に基づく交流の機会において、多くの人に支えられていることを自覚し、それらの人々への感謝の心情を育てることが大切であると考える。

本学級の生徒（中学２年生・男子19名　女子19名　計38名）は、お互いに何でも言い合える雰囲気をもつ反面、困っている友人を見てもなかなか助けられないことが多くみられる。また、ボランティア活動である地域クリーン作戦に際して意識調査を行ったところ、多くの生徒は「やらされている。」「できればやりたくない。」などと答えた。このことから、人のために自主的に働くという奉仕の精神が高まっておらず、日頃から自分たちを支えてくれている地域の人に対する感謝の心が十分にははぐくまれていないことがわかる。

そこで本研究では、多くの身近な人に支えられて生活していることを生徒に再認識させ、それら身近な人の支えに感謝する心情を育て、その行為に報いようとする意欲を育てるために、道徳の授業と職場体験学習とを関連させて、「感謝」の心情を育てたいと考えた。具体的には、はじめに学校でお世話になっている方々に目を向けさせるためにビデオなどを効果的に用い、それに気付かずに自分たちが生活している現状を振り返る。そして、職場体験学習では地域で働く方々と直接触れ合い、人々が一生懸命に働く姿や、その努力が社会を支えている事実に気付かせる。さらに、職場体験学習の中で接した人々の努力や思いを基に、身近な人々がこの社会をどんな思いで支えているのかを班での話し合いを通して考えることにより、身近な人々の思いやりに素直に感謝する心情をはぐくむことができると考え、本主題を設定した。

身近な人に感謝する心情が高まった生徒

学校教育目標

○向上　○自律　○奉仕　○敬愛

学年教育目標

○多様な価値観を認め合い、理解しようとする態度を育てる　○基本的生活習慣を育てる
○自己を高めるために根気よく継続的に取り組む態度を育てる
○諸活動を通して責任ある行動や、奉仕しようとする態度を育てる

手立て３

道徳の授業「働く人の思いにふれよう」（価値項目「感謝・奉仕」）において、多くの方々の努力が自分たちの生活を支えていることを再認識し、そのことに感謝する心情を深めるために、職場体験で学んだ「やりがい」の意味について意見を出し合い、それを受け入れ事業所の方々の意見と比較する。

手立て２

総合的な学習の時間「職場体験学習」の事前・事後を含む諸活動において、自分たちの生活が多くの人の努力に支えられていることを知り、それらの行為に対して感謝の心情をもつために、働く人の努力や仕事にかける情熱、思いに触れる。

手立て１

道徳の授業「身近な人に目を向けよう」（価値項目「感謝・思いやり」）において、身近な人の思いやりある行為に気付き、自分とのつながりを考えるために、日頃お世話になっている人物の写真や、ＶＴＲ映像を通して、その人々が自分たち生徒のためにどのような思いで仕事をしているのかを知り、その人にメッセージを書く。

目指す生徒像

○自分が多くの人に支えられていることに気付くことができる生徒

○他人からの思いやりに素直に感謝できる生徒

○相手に対して人間愛を基盤とした思いやりを発揮できる生徒

教師の願い

○地域の人々の思いやりに包まれながら生活していることを自覚し、その思いに感謝し、報いようと努力できる、人間愛に満ちた大人に成長していって欲しい。
○目に見えない人と人とのつながりに気付き、そこに込められた思いやりや感謝の心に素直に感動し、感謝できる人間になって欲しい。

生徒の実態

自分が多くの人に支えられているという自覚が弱い。人に感謝されたいという意欲はもっているが、自分から主体的に行動することができない。

図１　全体構想図

Ⅱ　研究のねらい

道徳「感謝と思いやり」〈感謝２－（２）〉において、道徳１で自分が日頃お世話になっている方の思いやりある行為や自分とのつながりについて考える学習、総合的な学習の時間に行う「職場体験学習」において地域の人々と接し思いやりに触れる体験活動、道徳２で多くの方々が自分たちのためにさまざまな支えとなってくれていることを振り返る学習を通して、人に感謝する心情が高まることを、実践を通して明らかにしていく。

Ⅲ　研究の見通し

次の見通し１・２・３の道徳の授業や体験活動に取り組むことで、地域の人に感謝する心情が高められるであろう。

１　道徳１「身近な人に目を向けよう」において、日頃学校でお世話になっている人物の写真や、ＶＴＲ映像を通して、その人々が自分たち生徒のためにどのような思いで仕事をしているのかを知り、自分とのつながりを考え、その人にメッセージを書くことで、自分の身の回りの人の思いやりある行為に気付くであろう。

２　総合的な学習の時間「職場体験学習」の諸活動において、働く人の努力や仕事にかける情熱に触れ、社会奉仕の精神を学ぶことで、自分たちの生活が多くの人の努力に支えられていることを知り、それらの行為に対して感謝の心情をもつことができるであろう。

３　道徳２「働く人の思いにふれよう」において、職場体験で学んだ「やりがい」の意味について意見を出し合い、それを受け入れ事業所の方々の意見と比較することにより、多くの人の努力が自分たちの生活を支えていることを再認識し、そのことに感謝する心情を深めることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

（１）身近な人々への感謝の心情が高まった生徒とは

①　周囲の人々に気を配り、日常生活の中で自分が多くの人の努力に支えられていることに気付き、その行為と自分とのつながりについて考えることができる。

②　多くの方々から与えられる「思いやり」ある行為に対し、素直に感謝し、その心情を手紙やメッセージなどの方法を使って表現することができる。

③　自分を支えてくれる身近な方々に対しての「感謝」する心情の表れとして、他の人に対して積極的に「思いやり」ある行動をとることができる。

（２）職場体験学習と道徳の時間との関連について

①　職場体験の事前指導の中で、受け入れ先の事業所の方の仕事に対する思いや信念、やりがいなどについて学んでくることを確認し、その思いが自分たちの生活を支えてくれていることに気付くための素地とする。

②　活動中は、仕事への真剣な取り組みを目の当たりにしたり、作業指導を受けたり、体験したりすることにより、働く人々に対する尊敬の念が深まり、道徳の授業で学んだ内容をより強い実体験としてとらえることができる。

③　事後指導では、活動中にお世話してくれた人の行為の一つ一つに思いやりが込められていることを再確認するだけでなく、働くことが自分たちの暮らす社会を支えていることに気付き、そのことに感謝の気持ちをもつことができる。

（３）感謝する心情をはぐくむ要素について

生徒が身近な人々に感謝する心情をはぐくめるよう、次の４つの視点に焦点化した。

①　「自分自身」を謙虚に振り返り、多くの人に支えられている事実に気付くこと。

②　「周囲の人」の思いやりある行為と、その行為を支える思いに気付くこと。

③　その両者を交流させる「経験」を大切にすること。

④　家庭→学校→地域と、徐々に広がっていく「場」を意図的に設定すること。

以上の４つの観点から生徒の姿を見て、実態を把握することによって、道徳の授業で取り上げる内容を決定した。

手立て１道徳授業「身近な人に目を向けて」では、学校の中でお世話になっている方々（公仕の方・給食関係者）の写真を使い「人物当てクイズ」を行い生徒の興味を引き出す。そして給食センターの方々のインタビューＶＴＲを視聴し、自然に感謝の気持ちをもつようにする。

手立て２「職場体験学習」では、学校を離れ実社会で生活する経験を通し、働くことの厳しさや大切さ、日頃感じられない身近な人々の努力や思いやりに触れる経験の場とし、手立て１で学習した視点を生かして、様々な行為に対し感謝する気持ちを見出す経験を積む。

手立て３「働く人の思いにふれよう」では、職場体験受け入れ事業所からのアンケート結果を基に、働く人々の思いについて話し合い、自分たちが生活する社会を支えている人々の努力に目を向け、それに感謝する心情をより深める。

2　実践の概要および結果と考察

検証にあたっては、生徒の感想などの記述の分析と生徒の活動の様子、ならびに抽出生徒Ａ男の言動の変化に注目する。

抽出生徒Ａ男は、学力が高く、自分の意見を明確に表現する能力をもっている。この学習を通してもっと素直に感謝の気持ちを表現できるようになってほしい生徒である。

（１）身の回りにいる人の思いやりある行為に気付くことができたか。

ア　実践の概要

導入では、お世話になっている方々の身近な例として、学校でお世話になっている公仕の方や牛乳配達員の方の写真を使った人物当てクイズを行い、思いやりある行為になかなか気付かない現実に目を向けた。そして、給食センターの人々の仕事ぶりとインタビューを収めたＶＴＲを視聴し、ワークシートに感想を書いた。さらに、その努力を支える思いについて意見を出し合い、終末では給食センターの方々にメッセージを書いた。

イ　結果と考察

導入の人物当てクイズでは、公仕の方の写真にはすぐに気付いたが、牛乳の配達員や給食のパンの配達員の方々の写真については最後まで気付かなかった。このことから生徒は、毎日廊下等で顔を合わせる機会がありながらほとんど意識していなかったこと、あるいは、言葉を交わしたりすることが無かった実態に気付くことができた。

次に、お世話になっている方の一例として、給食センターのＶＴＲを視聴した。内容は、仕事の場面５分、インタビュー１５分程度のもので、「仕事に就いたきっかけ」や「仕事の上でのやりがい」などについてインタビューした。ビデオを視聴後、どんなことを感じたかをワークシートに記入させたところ、資料１のような感想を書いた。その中には「私たちの事を考えてくれている。」や「ものすごく気持ちが込められている。」など、自分たちのことを考えてくれていることへの気付きの記述や、「残してしまうなんて悪い。」「残菜を見るのは辛い気持ちだろ

う。」という相手の心情に寄り添った記述などが見られる。Ａ男も給食に「多くの人が関わっている」ことに気付き、給食センターの努力に対して「すごい」という心情をもった。これは、A男が給食センターの方々の仕事の内容を改めて知り、その努力のすごさ、細やかな気配りなどに感動し、それが自分たちの健康のために行われていることを知ったことによると考えらる。

終末では、生徒はこの授業で学んだことを基に資料２のような給食センターへのメッセージを記述した。A男は「ありがとうございます」と直接「感謝」の言葉を記述し、他の生徒も、「これからは残さずに食べたいと思う。」など今後の自分の行動目標などを明確に記述した。

以上のことから、道徳１の授業の中で、生徒たちが、身近な人の思いやりある行為に気付くことができたといえる。

資料1　ＶＴＲ視聴後の感想

◎毎日作ってくれている給食を残してしまうなんて、とても悪いと思いました。だから、なるべく残さず食べようと思いました。
◎やはり、残った給食を見ると辛いんだな、と思った。私は親が働いたお金で給食を食べられるということと、残したら給食センターの人も悲しいんだろうな、と思って残さず食べている。
◎すごく私たちの事を考えながら仕事をしてくれているんだと感じた。
◎たかが給食と思っていたけれど、それは違ってものすごく気持ちが込められていたんだと思った。
◎5000食の給食を作っているなんてすごいと思った。毎日食べている給食に多くの人が関わっているんだなと思った。（A男）

資料2　給食センターへのメッセージ

◎いつもおいしい給食をありがとうございます。吉田先生が撮ったビデオを見て、給食センターの方々が大変な思いをして作ってくださっていることが良く分かりました。これから給食を残さずに食べたいと思います。これからもおいしい給食をよろしくお願いします。（A子）
◎毎日おいしい給食を作ってくれてありがとうございます。いつも楽しく給食を食べています。これからもおいしい給食をお願いします。（A男）

（２）社会を支える多くの人の努力に対して、感謝の心情をもつことができたか。

ア　実践の概要

道徳１の授業での気付きを生かす体験の場として、「職場体験学習」を３日間で行った。

事前に道徳１で使用した給食センターのＶＴＲに収録されている「職場体験に臨む中学生へのアドバイス」を視聴した。活動中は各事業所の日程に従い、作業を体験し、講話を聞いた。事後にはお礼状を書き、班での学習のまとめと発表会を行った。生徒が受入れ事業所の方々の働く姿から自然に感謝の心情を抱けるようにするため、職場体験をする目的を、表面的な「仕事の内容調べ」でなく社会を支えている人々の努力や奉仕の精神に触れるという点に焦点化させ、働く方々の思いを考えたり、質問したりして記述する学習プリントを使いながら活用した。

イ　結果と考察

生徒は３日間の体験を終えた後、それぞれの職場宛に「お礼状」を書いた。職場体験の事前学習では、「授業だから行く。つまらなそう。」と消極的な態度を示していたＡ男は、資料３のような手紙を書いた。この中でＡ男は仕事の苦労に気付き、また、一つのものを売るだけでも、その裏には多くの気配りや、気持ちの込められた行為が隠されていることに気付いていることが分かる。また、他人の為に心配りをすることが仕事のやりがいにつながっていることが「少しわかった」という言葉から、Ａ男の心情が変化し、職場体験学習に積極的に取り組めた様子が読み取れる。

また、事前に活動への不安を訴えていたＢ男は、資料４のようなお礼状を書いた。この中でＢ男は、職場体験への不安が職場の方々の思いやりある応対で消え、それに対して感謝の気持ちを感じたことがわかる。また、職場の方々の態度から、他

資料3　A男のお礼状

（前略）簡単そうな仕事も、実は大変で、楽な仕事はないと分かりました。そして、お客様みんなに満足していただけるように、すごく細かい所まで気を配っているということが分かりました。普段普通にものを買っていますが、その裏にはたくさんの人の気持ちが込められているんだなと感じました。短い間でしたが、仕事のやりがいが少し分かったような気がします。（後略）

資料4　B男のお礼状

（前略）初日、僕はちゃんと仕事ができるのだろうかと心配しながらその日を迎えました。しかし○○堂の皆さんはとても優しく接してくれ、そんな心配は吹き飛んでしまいました。そんな皆さんは仕事に集中し、お客様のことを第一に考えることのできる、素晴らしい皆さんだと思いました。これからは、僕も○○堂で学んだ「人の心を思いやる」ということを考えながら、この先生活していきたいと思います。（後略）

人のために努力することの素晴らしさを感じ、自分も見習っていきたいという心情をもったことが読み取れる。これは、職場体験において、今までは意識していなかった身近な人々の思いやりを再認識したことにより、周囲の人々に感謝する心情が呼び起こされたものと思われる。

以上のことから、職場体験によって身近な人に感謝する心情を抱くことができたと考える。

（３）社会を支える多くの人の努力に対して、感謝の心情を深めることができたか。

ア　実践の概要

道徳２の授業として、職場体験学習で学んできたことや感想を基に話し合う活動を取り入れた授業を行った。導入では、職場体験で感じた仕事の「やりがい」についてグループで考え、カードに書き、黒板に掲示した。それを内容ごとに分類し、さらに事業所からのアンケート結果と照らし合わせ、比較することで、「やりがい」は「社会への奉仕の気持ち」と深く結び付いていることについて話し合った。終末では、ワークシートに感想を記述しながら、身近な人々の思いやりある行為に感謝する心情を深めるとともに、思いやりある行為に支えられている自分を振り返り、見つめ直す授業を展開した。

イ　結果と考察

グループでの話し合い活動では９つの班から合計45枚のカードが提出された。それを黒板に提示し内容ごとに分類したところ、資料５のような結果になった。45枚中、「感謝」や「人の役に立てること」などに触れたものは合計10枚と、全体の約２割であった。これらを分類する過程で、生徒から、「自分たち生徒の考えたやりがいは、『自分の満足』に視点を置いたものが多いのではないか。」という意見が出された。その意見を生かし、黒板を「自分の満足」と「相手の満足」という二つの視点によって二分し、再び分類した。その結果、ほとんどの生徒が「自分の達成感」や「成功した時」「自分の好きな仕事に取り組めるとき」という視点で仕事の「やりがい」をとらえていることがはっきり分かった。

次に、この結果と比較するため、あらかじめとっておいた事業所からのアンケート結果を配布し（資料６参照）、生徒に自分たちの意見との比較をさせた。生徒の意見とは違い、事業所へのアンケートの結果は、仕事の「やりがい」は「相手に何かをする」ことで喜びを感じることである、という点が共通しており、生徒もその点にすぐに気付くことができた。

この両者の違いについてＡ男は、「先生に聞かれたから、とりあえずいいことを答えたのではないか。」と事業所の方の意見に対し疑問を述べたため、それについて話し合いを行った。教師からは「逆に、直接聞かれたら照れくさいことも、顔が見られないアンケートならば本当のことが書けるのでは。」とアドバイスし、職場体験での自分自身の行動と、事業所の人の行動と

資料５　班の話し合いから出された意見

○仕事を終えての達成感･やってよかった　11
○上司や他人に認められた時　2
○仕事が楽しいと思えた時　2
○一生懸命やった時　2
○仕事が成功した時　5
○ライバルに勝った時　1
○新しい発見をした時　2
○自分の好きな仕事に取り組める時　4
○仕事が多い時･内容の濃い仕事をする時　3
○壁に直面した時　1
○自分の方針がかなった時　1
○お金をもらった時　2
◎人の役に立てること　2
◎お客様に喜んでもらう時　2　→相手の満足
◎相手に感謝された時　6

資料６　受入れ事業所からのアンケート結果

仕事の中で一番の「やりがい」は何ですか。

A　うちを利用して頂いて、「よかったよ。」と言ってもらえるとうれしいです。ラーメンならラーメンがどうしたらもっとおいしく作れるか、新しいメニューを考えたり、毎日来てくださるお客様があきないようにランチのメニューを考えたり、大変だけれどやりがいにもなっています。

B　入荷した商品を店内に出し、それをお客様が気に入りお買い上げして頂いたときが一番うれしいし、やりがいだと思います。

C　お客様の喜ぶ顔。「わあ、きれいになった。」「ああ良かった。」のひと言。

D　お客様が喜んで帰るのを見ることです。

E　一番としていえることはやはり「世のため人のため」ということです。お客様の前に立ち、その場でできる限りの笑顔で接客をする。それが個々のお客様の「至福の時間」をつくり、また新しい笑顔が生まれる。やりがいであり、目標となっています。

F　家族です。家族の生活を守る。また、自分で作った製品が社会で喜んで使ってもらえること。

を照らし合わせるように促した。するとＡ男の意見に反して、大多数の生徒は、「職場の方の意見は実際の行動に表れていた。」という意見を発表し、職場の方々は誰かのために一生懸命努力し、相手が喜んでくれた時にやりがいを感じるという事実を知り、納得した様子が見られた。

終末の感想の中で（資料７参照）Ａ男は「働いている人は自分が考えていたよりも地域のことを考えていた」と自分の今までの考えを振り返ると同時に、「誰かのために何かをすること」がやりがいであるということを学んだことが分かる。また、Ａ男は事前調査で自分が感謝を感じる相手として、「親・友人」の二者のみを挙げ、「普段はあまり感じない」と答えていたが、ここでは「社会の全てのことに感謝してもいいと思う。」と書いている。これは、一連の道徳授業の中で、社会で働いている人々の全ての行為に「思いやり」が込められていることや、それに「感謝する」ことの意義にＡ男が気付いた結果であろう。また、Ａ男以外にも全体の約３分の２の生徒が終末の感想の中で「人に感謝される人になりたい。」と記述した。

資料7　A男の授業の感想

> **自分たちが考えていたよりも、働いている人は地域のことなどを結構考えていた。ほとんどの仕事は、誰かのためにやっているということが分かった。誰かのために何かをするのがやりがいになると思う。僕は、社会の全てのことに対して感謝してもいいと思う。**

このような結果から考察すると、生徒は、事業所の方々の行為に直接触れた経験を基に、「相手のために働くこと」の意義や素晴らしさについて考えたことで、「人の役に立ちたい」という新たな目標や意欲をもつようになったと考えられる。

以上のことから、道徳２の授業を通して、社会を支える多くの人々の努力に対して感謝する心情がより深められたといえる。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○　道徳授業の中で、身近な人の思いやりある行為やそれらの人々の努力をＶＴＲとして取り上げたり、「やりがい」について、実際の職場体験学習での体験を資料として考えたりしたことで、日頃なかなか見られない努力やその努力を支える思いについて深く考えることができ、身近な人に対する感謝の心情を高めることができた。

○　道徳１で日頃多くの方にお世話になっているという事実に注目させた結果、職場体験活動への取り組みも充実し、そこでの体験を道徳２で資料として使ったことで、職場での体験の意味を生徒自身が再びとらえ直し、その中から感謝の心情を自然に高めることができた。

○　学校という身近な「場」と、職場体験という広がった「場」を関連させ、その両者を「働く人々の思いに触れる」という視点で共通させたことにより、生徒は様々な「思いやりある行為」に注目することができた。また、それらの行為を「自分の体験」として受け止め、自分も人の役に立ちたいという心情をもつなど、道徳的実践力の高まりが見られた。

2　今後の課題

職場体験学習は中学生がたいへん真剣に取り組む姿が見られ、大人へ成長できる点で意義が大きい行事である。それを「感謝の心情を高める」という道徳授業の視点から見直したことにより、生徒に身近な人々の努力を見つめる視点を与え、感謝する心情を高めることに役立った。

今後はさらに、職場体験学習のような特別な状況下だけではなく、なにげない毎日の生活の中に根ざした感謝の心情にも触れていく必要があると考える。その結果として、生徒の心に思いやりや奉仕の精神が根付き、人のために進んで行動できるようになると思う。今後もそのような気持ちをもった生徒の育成をめざして、努力していきたい。